

## タンザニアあちこち

### タンザニアあちこち 1

2013年7月、タンザニアに来て2年が過ぎた。私が赴任した JICA 支援プロジェクトは、タンザニアにある約 150 の県が所管する灌漑地区を適正に運営管理するための人材育成がテーマである。そのプロジェクトで参加型維持管理という分野を担当している。

プロジェクトのニックネームは TANCAID というが、

TAN はタンザニアでいいのだが、CAID は“Capacity Irrigation Development”とちょっとこじ付けっぽい。同じタンザニアで実施されている TANRICE にちなんでのネーミングで、TANRICE は、稲作振興プロジェクトだから TAN と RICE で分かり易い。ちなみに TANRICE は灌漑の関係者なら誰もが知る、キリマンジャロの麓のローワーモシ地区を拠点とし、70年代に始まった「キリマンジャロ農業開発プロジェクト」から続いている老舗のプロジェクトである。

TANCAID は 500 ヘクタール以下の小規模灌漑地区を対象としており、近代的な施設を有しない伝統灌漑も含めるとそのような小規模の灌漑地区は、タンザニア全土に 2,000 近く点在している。日本の約 2.5 倍の面積に点在する灌漑地区から 42 地区を選定して、モデル地区となるよう研修を実施しているから、おのずと地方出張も多くなる。タンザニア全土が7つの灌漑ゾーンに分けられていてその下に県があり、村があり、灌漑地区がぶら下がっていると簡略にすれば、研修受講者はゾーン職員、県職員、村職員、農民の順に増えてゆく。とにかく出張の多いプロジェクトであることは間違いない。私も2週間に1週間はどこかのゾーンへ出かけ、私の専門である維持管理の研修を支援している。

こんな活動をしていることをイメージしながら、旅芸人さながら行く先々のタンザニアの様子を紹介したい。

【ニヤマチョマ】スワヒリ語でニヤマは肉、チョマは焼く、いわゆる焼肉である。これにメイズで作ったウガリとトマトや玉葱を軽く酢であえたカチュンバリをつけて、ニヤマチョマ・ウガリと注文する。肉は、山羊、羊、牛、鶏があるが私は山羊が好きである。羊、牛は、ちょっと独特の臭いがあり、鶏は日本でも食べられるからたまにいい。ただ



写真: 焼いている山羊のうまそうな部位を注文すると2cm角ぐらいに切ったものを注文の量に応じて皿に盛って出してくれる。



写真: 首都ドマへ行く途中の道端の肉屋にぶら下がった山羊の肉。カウンターパートのお気に入りの店。

上等なニヤマチヨマにありつくためには、タンザニア人と一緒にがいい。注文の多いタンザニア人と一緒なら間違いない。出張先で何度か一人で食べに行ったが、だいたい注文の時の調子のいい受け答えと違って、期待はずれの肉の塊が皿に盛られてくる。そんな時は控えめな私は骨にこびり付いた冷めた肉を貪りながら、苦笑いするしかない。ダルエスサラームの我が家の隣でも山羊が飼われているが、見ていると一年中草ばかり食べている。食べて寝るだけの生活も出張続きの時には羨ましい。

【ホテル】出張では寝るだけだから豪華なホテルは要らない。いつも泊まるホテルはだいたい決まっている。値段は朝食付きで、こちらで 30,000 シリング、今のレートで 1,800 円ぐらいだろうか。部屋は、ベッドと机、それにシャワーとトイレ、たまに洋服ダンスが付いている。このクラスのホテルは狭いが、だいたい小奇麗で快適である。かなりの田舎では、一泊 500 円もしない宿にも泊まったが、バケツのちょっと濁った水で一日の疲れを洗い流すと、ホンジュラスでの協力隊員の時を思い出して何故か少し嬉しかった。一度、ホテルの石鹸が薬草石鹸だったので臭いが気になったが、ほかに無ければ仕方ない。ダルエスサラームに近いモロゴロでは、次女の「あい花」と同じ名前のロッジ“AIKA”を偶然見つけた。今では常連である。“AIKA”はチャガ族という部族の言葉で「感謝」の意味らしい。



写真: AIKA ロッジの一室。パン、玉子、コーヒー、果物の朝食付で 25,000 シリング(約 1,500 円)

## タンザニアあちこち 2ー西部湖水編

灌漑施設の運営管理の研修が、全土を7つに分けた灌漑ゾーンのどこかで実施されるとき、その支援と指導のために首都から出張して行く。ビクトリア湖周辺の地域を巡った時の様子を紹介する。



ムワンザから、ビクトリア湖を約 30 分かけてフェリーで対岸に渡る。人も車もひしめき合っている。

【ビクトリア湖】アフリカ最大の湖である。タンザニア、ケニア、ウガンダ3カ国の国境が湖面に浮かぶ。1858 年にイギリス人探検家スピークにより“発見”され、時の英国女王ビクトリアの名前からビクトリア湖と命名したらしい。英国植民地時代にこの湖に導入された強大魚、スズキに似たナイルパーチの漁獲が重要な輸出産業に繋がり、加工された白身が日本の食卓にも並ぶ。昨年の出張で、ビクトリア湖の東の町ムソマから西の町ブコバまで 700 キロメートルほどを移動した。途中はフェリーを使った。対岸に着いて人も車も我先に動き出す様子は、より豊かな生活を求めるアフリカの元気の象徴でもある。かつての日本も同じだったと、行き先が見えない今の日本の状況が交錯する。

【タンザニア・ウガンダ戦争】平和を愛する穏やかなタンザニア人も、国家という共同体の中では戦うことも避けられないのだろうか。1970年代のウガンダで悪名高かった元大統領のイディ・アミンが、1978年にタンザニアに侵攻した時に標的となった教会の跡地を、ウガンダ国境に近い灌漑地区へ行く途中で見上げることがあった。教会を破壊して神をも凌ぐアミンの権威を示そうとしたのだろうか。国境という魔物に未だに翻弄されているアフリカの苦悩を見る思いがした。タンザニアはこの戦争で反撃してウガンダの首都カンパラを攻略したが、隣国同士の戦争から得るものはなかっただろう。



写真:ウガンダ国境近くの町キヤカにある破壊された教会跡地。この先にある橋も破壊されたが、今は復旧している。



写真:ビクトリア湖のフェリー乗り場で売られていたサマキ。

【サマキ】サマキはスワヒリ語で魚を意味する。その中でもビクトリア湖で主に捕れるティラピアのことをサトウ(SATO)と呼ぶ。お陰でどこへ行っても自己紹介の時に、「私はサトウです」と言った後に「サマキです」と言って微笑んでもらっている。初めて会った農民の中には、こいつは何者かと品定めをしている人もいるが、このサマキで一気に雰囲気緩和が和む。最近は泳ぐまねもしてサマキになりきっている。思いがけない恵みである。



写真:西部タボラゾーンでは小学校を使って研修を行う。研修に集まる農民が着ている青いシャツはモデル地区のしるし。

【小学校】地方での研修の時はよく小学校を使わせてもらう。子供たちの授業中に貸してもらった教室で大人も勉強である。スワヒリ語で「シカモー」は年長者に対する尊敬を込めた挨拶で、「マラハバ」で答える。タンザニアの子供たちは、最近の日本の子供たちには少なくなった、年長者に対する挨拶が普通にできる。たまにもじもじしている子もいるが、だいたい胸を張って握手を求めて、先の挨拶をしてくれる。窓ガラスも電気もない教室だが、そこに集まる子供たちははつらつとして元気なアフリカそのものである。壁に描かれた世界地図の日本は本州だけだったが、子供たちにとって村以外はどこも外国なのだろう。

プロジェクトの延長が決まり、私の任期も2014年の6月まで



となった。まだ訪ねていない灌漑地区がいくつかある。普通のタンザニアの人より国中を東西南北、津々浦々、仕事とはいえ楽しんでると確信する。そう思えば、車、飛行機、時には船の移動も苦にならない。

写真: 学校さながら、研修には給食も出る。この日は、ご飯と山羊肉と野菜が盛られた。

### タンザニアあちこち 3ー東部山地編

地方で実施される灌漑施設運営管理の研修支援のため、首都から出張する旅の話はキリマンジャロ山方面を紹介する。

【寒さ】アフリカイコール熱帯の国々、今でも裸に近い格好で野生動物を追いかけている。私の実家がある山梨の田舎の親戚のお年寄りはそのようになっているかもしれない。実は私も子供の頃、アフリカは一年中日本の夏より暑いと思っていた。そのアフリカで標高 1,500 メートル近くの町に出張してとんでもない寒さに認識不足を思い知らされた。周到な準備をせずに出かけたアルーシャという歴史的にも有名な町で、持参の肌着を2枚重ね、その上に半袖のワイシャツを2枚重ねたが、寒さに研修での集中力を失った。ダウンジャケットを着た職員に、これじゃあ暑すぎるだろうと冷やかした私の負けであった。タンザニア赴任前のケニアでの仕事でも、標高 2,300 メートルで寒さを経験していたのに、寒さ対策を怠ったのは、子供の頃のアフリカが今も心のどこかで生き続けているからだろうか。



写真: ダウンジャケットを着て農民を指導する職員。農民も長袖で研修に参加していた。

【サイザル】キリマンジャロ州方面の出張で広大なサイザル麻のプランテーション農園を見かける。第2次世界大戦の頃はタンザニアの最大の輸出品目だったらしい。この地域では今でもコーヒーと共に盛んに栽培される。整然と並んで植えられている姿は田んぼの稲のようでもある。サイザルは生長が進むと株の真ん中から木の幹のようなものがそびえ立つ。これは花茎らしい。この花茎が伸び始めると麻の収穫量が減り、そろそろ植え替え時期らしい。臺(とう)が立つとはまさにこのことかもしれない。この花茎は、真っ直ぐの上の中が空洞で軽いため田舎のかやぶき屋根のフレームにも使われる。カウンターパートによるとサイザル農園に草を食べにくる牛たち



写真: はるかに広がるサイザル農園。真っ直ぐに植えられた株は正条植の稲にも似ている。

は盲目が多いとか、剣のような葉の先端の突起に気が付かず競って草を食べようとするからだ。本当だろうか。



写真: キリマンジャロ州モシの近くから見るキリマンジャロ山。温暖化で冠雪が毎年少なくなっているようだ。

【キリマンジャロ山】言わずと知れたアフリカ最高峰 5,895 メートルの山である。出張ではキリマンジャロ近くの事務所へもよく行くので、今では見慣れた風景になっている。見慣れた風景といえば、実は実家が富士山の麓だが、子供の頃から見ていた富士山の頂上に40才を過ぎるまで登ったことがなかった。ケニア在住の頃、子供たちと挑戦したが、明け方からの降雪で断念したケニア登山の挫折から、是非今度はキリマンジャロを制覇したいと思っていた。出張の合間をぬってどう時間を工面するか、キリマンジャロの近くを通るたびに眺めるだけの日々が続いていた。ところが、小学3年生の時に富士山の頂上也諦めた三男が私よりも先にキリマンジャロを制覇した。息子が通うダルエスサラームの学校でキリマンジャロ登

山があり、それに参加した息子が最高峰ウフル峰に立ったのだ。6つある登山コースの内の一番人気のあるマラングコースを6日かけて登ったそうだ。これには20名の生徒が挑戦して、半分の10名がウフル峰まで到達した。その日は、10名が登頂に成功したとの連絡のみだったので、その中に息子がいたのを翌日のメールで確認した時は、出張先のビクトリア湖近くの町から家内に電話をかけ喜びを分かち合った。息子は最後の宿泊地キボ・キャンプサイトでは辛くて涙が出そうだったとか。そして頂上では仲間と抱き合い本当に泣いたとか。今年の4月から日本の高校へ通っている息子の忘れられないアフリカの思い出になった。ちなみに息子はガーナ生まれで自称アフリカの王子様である。

そう言えば、キリマンジャロ出張でいつも使うホテルが一杯だったので、別のホテルに泊まったら昔懐かしい黒い手回し式の電話機にお目にかかった。タンザニアに送られる中古品は車や自転車ばかりではないようだ。実は日本の自宅にも実家から持ってきた同じものが置いてある。今はタンザニア在住のため電話回線を切っているので、その電話は鳴ることもなくテーブルの上で休憩中である。



写真: キリマンジャロ方面への出張時に泊まったホテルにあった懐かしい電話機。

#### タンザニアあちこち 4-期待すべき将来像

これまで訪れた灌漑地区を地図で見ると3年間の旅の思い出が蘇るが、最後にもう少し仕事の話をしておこうと思う。私の担当はタンザニアの小規模灌漑地区(500ヘクタール以下の灌漑地区)を対象とした参加型維持管理だったが、参加型という言葉を知ると、なんとなく農民の参加を考えてしまうのが普通だろう。でもよく考えるとそれは農民に対しては失礼な言葉かもしれない。何故なら、タンザニアの灌漑農業の主役は農民であり、どんなに国が頑張ったとしても最後の決め手、事業の成功は農民の手の中にあるのだから。あえて参加型を理解するならば、

「灌漑事業に参加する農民と灌漑農業に参加する政府」の双方向の構図で理解すべきかと思う。

プロジェクトの維持管理分野がカバーした灌漑地区は全国 42 地区になる。近代的な灌漑システムを有する地区を分母としたらタンザニア全土の 2 割弱程度になるが、それらを 7 灌漑ゾーンに均等に配分し支援した。既存の地区もあれば新規の地区もあり、水利組合をこれから設立する段階の地区もあったが、プロジェクト成果の汎用性を考え、あえて様々なタイプの灌漑地区に取り組んだ。3 年間を通して、いくらプロジェクトが頑張ってもなかなか成果が現れない地区もあったが、将来のモデル地区になるべくそれなりに成長した地区が現れ始めたことが嬉しかった。最終的にはそれぞれのゾーンで優良地区を 1 か所選んで、そのノウハウを研修パッケージ(研修からモニタリング・評価までの流れを体系的にまとめたもの)の中に組み入れ、最終成果品としてタンザニア側に引き渡した。

活動中にいつも頭の片隅に留めていたことは、プロジェクトの継続性、再現性であった。そのため、プロジェクト終了後も使える維持管理分野のモニタリング・評価シートを作成した。これは、小規模灌漑事業を実施する上で策定した「包括的ガイドライン」を使っているかどうかを見るものだが、灌漑地区に関わる組織体制、農民の参加度(事業に対する貢献度)、資金調達および財務管理、維持管理技術レベル、法遵守の有無、実際の施設維持管理状況の 6 項目で評価している。その結果、プロジェクト目標を達成した地区は 7 割程度であった。全地区とはいかなかったが、これまで施設の維持管理は政府の仕事だと思っていた農民が、これは自分たちの仕事だと自覚し始めたこと、そして、農民が少しずつ変わって行くことに喜びを感じた、灌漑ゾーン、県職員たちに敬意を表したい。たとえそれが援助というフレームの中で展開される技術協力のフィルターを通して見えたものだとしても。

プロジェクトの次のフェーズも決まっている。その形が気になるところだが、3 年間関わったプロジェクト実施者の一人として、次は援助のフレームではなく、自助努力のフレームの中で技術協力が展開されることを切に願う。それこそが技術協力の本当の目的だと信じている。(佐藤勝正)

「アールディーアイ通信第 68 号/2013 年 12 月 15 日」、「第 70 号/2014 年 4 月 15 日」、「第 71 号/2014 年 6 月 15 日」、「第 73 号/2014 年 10 月 15 日」から